

作成日	2021年8月25日
学科・専攻名	生活福祉学科

教育課程・学習成果の検証

1. 学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

当学科の開講科目数は2018年度92科目から2020年度には50科目となっている。これは改組による2021年度の学科終了に向けて順次科目が終了していく過程にあるためである。しかし受講者数平均は2018年度21.3人から20.0人と変化はなく、学生の受講状況は安定しているといえる。非常勤比率では、2018年度80%であったが、2020年度は66%と減少しており、終了に向けても専任教員によるより手厚い教育体制がとられている状況である。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

2. 「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

卒業時アンケートで「本学科への入学前の期待」では、目指す資格取得ができること、また、そのための授業が充実していることを期待しており、卒業時点では資格取得ができたこと、そのための専門科目が充実していたことを評価している結果となっており、入学時の期待に応える教育体制になっている。免許取得状況では64%が教員免許を、37%が社会福祉士国家試験受験資格取得を、12%が介護福祉士資格を取得しており、これら免許の複数取得を叶えていることも学生の期待を裏切らないことに繋がっている。進路・就職については、2018年度卒業生における就職決定率は98.7%である。教員免許取得者56人中教員としての就職が35人(62.5%)であり、課程での教育内容と就職が結びついた結果となっている。在学中での成長を実感している学生が多い（「とても成長したと思う32.7%、ある程度成長したと思う65.3%」）ことも示されており、2018年度からの回答の推移を見ても、その割合は高くなっていった。身についた能力としては、「専門分野の知識・技術を理解・習得する力」、「意見の違いや立場の違いを理解する力」、「意見の違いや立場の違いを理解する力」が大学全体値と比較しても高得点を示しており、これらの養成は当学科の専門教育内でのねらいとなっていることから、学科のDP及びCPの浸透と効果と思われる。また、それらの養成の源泉となるものについては、授業が圧倒的に多く、各授業が充実していることが伺われ、これは他学部・学科と比較して特徴的である。一方で成長の機会として、「ゼミでの難しいテーマにチャレンジしたこと」「卒業論文・制作を仕上げたこと」が例年大学全体と比較しても低く、ゼミの在り方、卒業研究指導について課題を残している。休・退学・留年数においては、ここ3年間で大きな変化はみられないが、退学率が若干上昇しているため、新型コロナ流行下における授業形態の変化において、学生の戸惑いや大学への馴染めなさには注意を払い、新入生の交流会や2回生の上級生との交流会などをオンライン上で行うなどしている。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

3. 学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

後期授業評価では、全体的には大学平均と同程度であったが、やや下回るものも見られた。特に学習時間、理解度を確かめながら進める、資料やテキストの分かりやすさ、フィードバック、教員のわかりやすさなどは大学平均よりも若干低い結果となり、学習時間やフィードバックなどは昨年来からのものであり、今後特に改善が必要と考えられた。しかし、学科の専門科目の中には、実践的に指導する科目も多く、新型コロナウイルス感染症流行による授業形態の変化が影響している可能性が考えられた。詳細で見ると、出席状況は大学平均と変わらなかったが、「学習時間」は-0.2ポイント、「理解度を見ながら進める」は-0.2ポイント、「資料やテキストの適切さ」は-0.3ポイント、「フィードバック」は-0.2ポイントと大学平均より低かったが、「学習時間」は大学平均と同じであった。「対面授業が適している」が大学平均と同じであった。昨年度は生活福祉学科の専門科目では大学平均よりも高かったことから、昨年度は遠隔授業に適していないと考えられた授業も今年度は多少改善されたのかもしれない。フィードバックについては、今年度も大学平均より低く、この点は遠隔授業の行いにくいことが問題点と考えられ、今後対面授業の再開とともに改善していくのではないかと予想される。生活福祉学科の専門科目の中には、看護、介護、福祉など対面授業において教育効果が高いものが多く、遠隔授業が多かった昨年度は学生の授業への姿勢や満足度などにおいて影響を受けたことが予想される。しかしながら、学習時間の確保、わかりやすさ、フィードバックなどはいかなる授業形態においても求められるものであり、教員の意識を高める必要があると考えられた。遠隔授業におけるフィードバック方法に関する研修、遠隔授業におけるわかりやすさについての研修、これらは教員のICT活用能力によるところが大きいと考えられ、こういった観点からの研修として6月には「ICT活用セミナー」を実施した。今後、学生の自主的な学習を促進する体制づくりに学科教員全体で考えながら新たな方策を模索していく。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

本学科は改組進行中で教員の所属が2学部にまたがる教育体制となっている。しかし、教員の必要人数は満たしており、カリキュラムに基づいた各専門分野の教員が置かれており、年齢は40代～60代の幅広い構成となっている。

【成果および向上施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項無し